



徳川家霊台：江戸時代

重要文化財

寛永18(1641)年に聖方の東照宮として建てられた。方三間、宝形造、銅板葺、正面一間に向唐破風の向拝が付いた同形式の建築が二棟並び、それぞれ家康と秀忠を祀る。外部は彫刻で飾り立てられ、内部の壁面は障壁画や彩色で彩られている。また、内部に納められた厨子は、蒔絵や鈔金具の技法の限りを尽くして荘厳された傑作である。

普賢院四脚門：江戸時代

重要文化財

四脚平唐門で、寛永年間に造営された行人方の東照宮より、明治25年に移築された。軸部は丹塗りで、彫刻には極彩色が施され、虹梁には龍や天女が描かれている。細部の手法には、江戸時代初期の特徴がよく現れている。



尼僧研修道場建設に伴う発掘調査

平安時代後期に谷状地形を埋め立て、建物が建てられている。それ以前の遺構・遺物が見られないため、この時期以降に、周辺が開発されたと考えられる。遺物では建築部材の舞良戸のほか、木製品が多数出土した。なお、調査地の建物と関連する遺物として「東寿院」銘の漆塗椀が出土している。



古絵図と発掘調査

発掘調査では、様々な時代の建物の痕跡や、日常雑器や宝物などが見つかります。その土地に残された暮らしの痕跡をもとに、文字には記されない当時の暮らしを明らかにしていくことが発掘調査の仕事です。

しかしながら、発掘調査では文献資料やその他の歴史資料とは違い、明確な答えが出ないことが多くあります。たとえば、どこの誰がという個人名や、建物跡の名称、1年単位の細かな年代などは発掘調査ではわかりにくいことです。こうした発掘調査の弱点を補うために、たびたび文献資料やその他の資料を参考にすることになります。

中でも高野山には多くの古絵図が残されており、発掘調査ではこの古絵図をもとに調査成果を検討していきます。古絵図には子院の名前が記されているので、文献に記録の残る火災層や遺物からわかる年代を手掛かりに、その年代に描かれた古絵図を参照すれば調査で出てきた建物跡の名前を知ることができます。

実際の発掘調査で出てきた建物跡と古絵図を比較してみましょう。大門の背面の発掘調査では、石垣に囲まれた敷地の中に井戸、溜め桝、

溝などが見つかり、大門のすぐ後ろに坊院が建っていたことがわかりました。出土遺物からこれらの遺構は江戸時代前半のものと考えられ、元禄元(1688)年の火災層に覆われていました。この年代を手掛かりに、建物が建っていた寛治元(1658)年の古絵図をみると、大門の背面のすぐ隣の区画には「小坊多数」と記されていることがわかります。おそらく発掘調査で見つかったこの敷地は、この「小坊」の一つに相当するものと考えられます。

また、その他の例では、現在の教化研修道場建設に伴う発掘調査において、規模の大きな建物跡が見つかりました。この建物跡には「屋敷地取作法」という建物を建てる前の厳格な儀式の跡が見つっています。この場所は古絵図に「宝性院」と描かれ、文献からも当時の門首宝性院があったことが知られていました。発掘調査においても「宝性」と記された漆塗椀が出土したことから、この建物跡が宝性院であることが考古学的にも裏付けられることになりました。

このように高野山の発掘調査では、古絵図をはじめ、文献資料など様々な歴史資料を駆使してその成果の検討が行われています。



大門背面で検出された坊院跡



古絵図に描かれた小坊跡



古絵図に描かれた宝性院跡



「宝性」銘の漆塗椀

歩いて知るきのくに歴史探訪 ～高野山再発見～

古絵図で歩く高野山文化財マップ-山内地区-

平成21年10月24日発行

発行：財団法人和歌山県文化財センター(〒640-8404 和歌山市湊571番地1)

編集・作成：田中元浩(埋蔵文化財課) 作成協力：結城啓司(文化財建造物課) 印刷：株式会社ウイング

*この見学会は平成21年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業の補助金を受けて実施しています。